

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

一般の部



令和八年七月度 入賞句一覧

投句数 五百四十句

名和 永山 選

特選

頑固さが肩のあたりに更衣

東京都世田谷区 関戸 信治

肩口にふつと触れる「重さ」と「季節の移ろい」が同時に立ち上がる、とても味わい深い一句です。「頑固さ」を物質的なものとし、更衣（夏の季語）の軽さや明るさに響かせています。季語の力を借りて「自分の内側の質感」をそつと触るように描いた作品です。派手な切れや劇的な展開はないのに、肩に触れる感触から心の奥へと沈んでいく深さを感じさせてくれます。

久女墓所訪ふをりからのほととぎす

愛知県豊田市 城山 悠水

胸の奥がすつと冷えて、同時にほととぎすの声が鋭く立ち上がる句です。「久女墓所訪ふ」に、強い情緒の核があります。「をりから」は、俳句ではしばしば偶然の必然化を担います。墓前でほととぎすが鳴くことは、単なる偶然ではなく、久女の俳句世界が現実の時間に重なってくる瞬間です。ほととぎすの声は外から届くものですが、墓前ではその声の内側に沈んでいくように響きます。追悼・敬意・季語の象徴性・偶然の必然化が見事に重なった作品です。

不具合を確かめ老ゆる半夏生

岐阜市 寺島 鎌太

老いの気づきと季節の影がそつと重なり、静かな痛みと諦念が漂う句です。「不具合を確かめ」という措辞が鮮烈です。老いは突然ではなく、身体や心の小さな不具合の積み重ねとして自覚されるもので、曖昧さがあるところにあるこの句の深さが宿ります。「確かめ」という動詞には、痛ましさと同時に、どこかに潔い姿勢もうかがえます。季語「半夏生」という季節の境目の季語が、老いの自覚と響き合います。季語の象徴性に託して描くという高度な表現が見事です。

秀逸

看護師の安堵の吐息ねぶの花

大垣市 平野 きぬよ

風薫る千木に光の集まれり

養老郡養老町 田中 紫香

人恋ふる乙女の頬は合歓の花

大垣市 平野 順一

歳月の殻円やかにかたつむり

大垣市 小林 研

いちどきに落つるさだめや夏椿

大垣市 立川 昌子

緑陰を天蓋とする乳母車

三重県四日市市 後藤 允孝

拘りの理由は言わず燕子花

本巢市 土川 楽人

雨もまた香に噎せてをり栗の花

愛媛県松山市 平野 ヒサエ

岩しぶく水の高鳴り夏はじめ

岐阜市 堀江 美州

はまなすや遠くにゐても近きひと

東京都武蔵野市 木嶋 純子

入選

特攻の恋ぶみ届く宵螢

岐阜市

伊藤 をさむ

廃校に止まぬ輪唱夏蛙

揖斐郡池田町

小川 智恵子

燕の巣あの腕白もパパになり

安八郡神戸町

大槻 恭子

風鈴の音絶えてより闇重き

和歌山県日高郡

水野 あき

花冷えや散るがさだめと知りて咲く

大垣市

安田 むつこ

杭瀬川水の怖さを知る螢

大垣市

一柳 国子

友逝きて紫陽花寺に涙雨

養老郡養老町

浅井 幸子

雨熄んで雨のしたたり七変化

大垣市

酒井 和美

別人になれたつもりのサングラス

東京都新宿区

花澤 ちいこ

鞆轡を並んで漕いだ彼は今

大垣市

大橋 浩美

やわらかき水の匂いや青田風

大垣市

岡田 幸子

絶へ間なきひかりの雨や竹落葉

神奈川県川崎市

立野 音思

富士望む丘も畑も新茶かな

愛知県瀬戸市

宮崎 諭志

下萌や地の胎動の始まりぬ

広島県福山市

栗本 リカ

精霊の宿る灯のごと闇の蓮

養老郡養老町

佐藤 咲楽

選者吟

梅雨明や爵の字ぱつと散らばりぬ

永山



一般の部